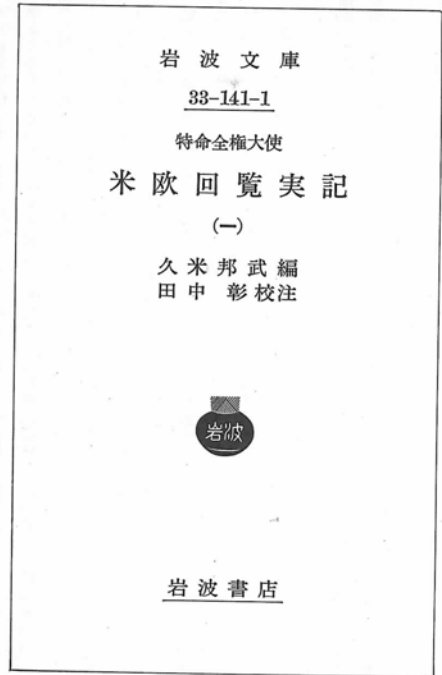


米欧回覽実記



例言

一 此書ハ、遣欧米特命全權大使、東京ヲ発シ、太平洋ヲ航シ、米國ニ留リ、圧瀾的洋ヲ経テ、
英、蘇、兩部ヲ回リ、歐陸ニ渡リ、仏、白、蘭、普、露、墺、瑞典ノ奥ヲ経歴シ、
亞刺伯、印度、支那ノ諸海ヲ航シテ、東京ニ復命スルマデ、日日目撃耳聞セル所ヲ筆記ス、明
治四年辛未十一月十日ニ起リ、六年九月十三日ニ止ル(即西曆千八百七十一年十二月十二日ヨ
リ同七十二年九月十三日マデ)、スヘテ全一年九ヶ月二十一ケ日ノ星霜ニテ、米欧兩洲著名ノ
都邑ハ、大半回歴ヲ経タリ、

田中彰解説

一 岩倉使節団の構成と特徴

右大臣岩倉具視を特命全權大使とする明治四年(一八七二)十一月の岩倉使節団は、幕末維新期
の最大にしてもっとも質の高い、そして最後の遣外使節団である。副使は参議木戸孝允、大藏卿
大久保利通、工部大輔伊藤博文、外務少輔山口尚芳で、総勢約五十名。

こうした職掌よりなる使節団の構成メンバーには、つぎのような特徴がある。

その第一は、大使・副使に、岩倉、木戸、大久保ら当時の明治政府の実力者が名を連ねている
ことである。しかも、大久保と木戸は薩長の代表的人物であり、理事官にはその息のかかった者
が多い。つまり、岩倉使節団の首脳は、岩倉のもと明治政府の薩長実力者を中心に、その派閥(藩
閥)的色彩で彩られている、といえよう。

だが、そのことと対照的にきわだったつぎの特色が、第二の特徴となる。すなわち、書記官に
は田辺太一や塩田篤信(三郎)、あるいは福地源一郎や川路寛堂のように旧幕臣が多く、また、彼
らを含めて随行の一部には、幕末期に遣外使節団の一員あるいは留学生として外国の地を踏んだ
経験者や外国の事情に詳しい者が選ばれているのである。

いふなれば、岩倉使節団は明治政府の薩長藩閥実力者をトップにして、幕末以来の国際的な経
験や西欧の文化の蓄積をもつ旧幕臣をはじめ有能・多彩な人材によって構成されている、という
ことになる。その意味では、この使節団は、幕末と維新、幕府と新政府との、歴史的、文化的な
連続と非連続を体現した存在だった、といつてよい。

加えて第三の特徴は、年齢の若さである。最年長者の大使岩倉でさえ出発時の数え年は四十七
歳、木戸、大久保はそれぞれ三十九歳、四十二歳で、山口は三十三歳、副使中いちばん若かった

伊藤は三十一歳であった。一行中もっとも若かったのは佐々木高行理事官随員の司法権少判事長
野文炳で、十八歳だった。岩倉使節団の平均年齢はほぼ三十歳、二、三十代を中心に使節団は編
成されていたのである。それは彼らが回覧する米欧という新しい世界へ対応するにふさわしい、
清新にして弾力的な受容能力を備えていた、ということになる。

だが、このような構成の使節団であったから、逆にそのことが使節団内部に問題をはらむこと
になった。そこに第四の特徴がある。

書記官や随員のある者が、幕末以来、欧米文明に接し、外国体験をもっていたのに対し、理事
官たちは国際的知識に乏しく、洋行経験はなかった。その点では伊藤を除いて大使・副使も同様
だった。

このことが、使節団内部で外国通とそうでない者とを色分けした。そして、ひとたび未知の外
国の地を踏むや、大使・副使の権威は色あせ、同じような理事官に対して、外国通の書記官たち
はさかんに愚弄するところがあった。この書記官たちが多く旧幕臣であったことから、佐々木高
行のことはいえば、「使節初メ理事官等、維新ノ仇カヘシヲ食ハサレタル景況ナリ」(『保古飛呂
比』明治四年十二月十二日条)ということになる。理事官の側からいえば、旧幕臣の書記官は、
高給目当ての「職人」ごときのものであって、その彼らが維新に功勞のあった理事官に向って何た
ることか、というわけである。

不満はくすぶったものの、大使・副使も、外国に出た以上、書記官たちの国際的知識に頼らざ

るをえないのだから、せいせい我慢せよ、という以外に手立てはなかった。
同じことは随員間にもあった。一方が外国通をもってその知識をひけらかせば、他方は逆にあえて東洋的蜜カラの行動で対処したのである。

歴史的、文化的な連続と非連続を體現した岩倉使節団は、同時に伝統と文明、和洋の混淆であり、その不協和音が折にふれてきしむ存在でもあった。大使岩倉が和服、他の副使が洋服、しかも岩倉は羽織・袴に洋靴といういでたちで写っている有名な写真は、じつはこの使節団のひとつの特徴のシンボリックな姿だったのである。

このような諸特徴をもつ使節団の中にあつて、右の外国通の書記官が理事官を愚弄する態度をみて、アメリカ到着旬日後の木戸の感懐は、将来の日本を予見して鋭いところがある。

つまり、木戸はそこに日本の文明と開化の皮相をみた。だから、このような皮相な文明開化であれば、もし将来アジアの諸国が日本の開化を慕って使節を送ってきたとき、いま岩倉使節団がアメリカの地でうけている厚遇と誘導のような態度をとりうるかどうか、また、このような皮相な開化の治者たちが、被治者たる人民一般に果してどのような対処のしかたをするだろうか、と疑問を抱いているのである(明治四年十二月十七日、杉山孝敏宛(之書簡)。それゆえに、木戸がこの皮相な開化と、底の浅い日本の文明の克服をめざして、教育制度に関心を払ったのも十分理由のあることだったのである。

しかし、結局のところ、この木戸の予見は当り、杞憂はやがて現実のものとなる。日本の文明

本文

三日 陰

*国務省ニ於テ国務掛ノ書記官「フィッシュ」氏ニ応接ス、

帰路ニ「デヨウシタウン」ニ至リテ、府ノ「カバナル、クーク」氏ヲ訪ヒ、遂ニ日本ノ「レガーション」ニ至ル(「レガーション」トハ公使館ナリ)、

四日 朝雪 昼晴

午後八時半、大統領ヨリ享宴ノ招状ニヨリ、白館ニ赴ク、此日ハ青堂ニ延ギ、大統領「グラン」氏ヲハシメ、文武ノ長官等、ミナ其夫人ト共ニ筵ニ会シ、款晤甚タ懇親ヲ竭シ、共ニ案ヲ對シテ、宴享ノ饌ヲ会食シ、十一時ニ至リ徹宴セリ、凡西洋ノ俗、享燕ニハ殊ニ敬礼ヲ致スコトニテ、以テ交際ノ大節トナス、主賓必ス夫妻相携ヘテ席ニ臨ムヲ礼トナス、

五日 晴

六日 雪

*国務省ニ至リ、第二次ノ応接ヲナス、

此日「インヂヤン」人五名、旅館ニ来リ、使節ニ面謁ヲ請フ、伊藤副使之ト会晤シ、須臾ニシテ帰ル、

夜「ホテル」ニ於テ大享宴ヲ設ケ、府中ノ官吏商豪ヲ招ケリ、○ホテルノ広座、教室ヲ粧飾シ、

岩倉使節団アメリカ回覧年表

(明ニ明治、陽ニ陽曆、断りのない場合はすべて旧曆で示す)

年 月 日	発 着 地	岩倉使節団関係事項	日本関係事項
明四・一・一〇	横 浜 着		二・三三 全国の県の改廢(使三府七十二県)
二・二	サンフランシスコ 着	(陽一八七二・一一・一五) 歓迎会続く。周辺諸機関・施設見学 サクラメントよりロッキークー越えを大雪にはばまれ、予定変更、ソルトレークへ	
二・二六	ソルトレーク 着	オマハ、シカゴを経て大陸横断 (陽一八七二・一二・二九) 大統領クラントと謁見(陽三・四)	
二・二七	ワシントン 着	大總統見學 条約改正交渉開始(陽三・一一) 全權委任状下付のため大久保、日本へ(翌日、伊藤発、日本着三・二四)	二・二五 土地永代売買解禁 二・二六 兵部省を廢し、

年 月 日	発 着 地	岩倉使節団関係事項	日本関係事項
三・一	ワシントン 着	この間、アメリカ憲法等の翻訳・調査、諸機関・施設の見學等相つゞ	陸軍省・海軍省設置 四九戸長・副戸長をおく
四・一	ニユーヨーク 着	ウニストポイントへ(五・六・八) 前大統領フィルモアを招待(五・九)	五・一 陸奥宗光、地租改正建議
五・四	ワシントン 着	音楽会へ(五・一三・一四) この日、大久保・伊藤ら日本発	五・三三 天皇、近畿・中国・九州へ巡幸
五・八	ナイアガラ 着	大久保・伊藤、朝、ワシントン帰着、午後、条約改正交渉打ち切り(陽七・二二)	
五・一七	ワシントン 着	大統領にアメリカ発の挨拶	
六・一七	ワシントン 着		
六・二二	ワシントン 着		
六・二四	ワシントン 着		
六・二五	ニユーヨーク 着	議事堂その他諸機関・施設見学 バイブル会社その他見学	七・一 副島外務卿、マリ
七・三	ボストン 着	市中、周辺の諸機関・施設見学 イギリス、リバプールへ(陽八・六)	ア・ルース号の取調ベを命じる